

2010年1月号 目次

【トピックス】

残留農薬検査(その3)	1
輸入豚肉中の動物用医薬品検査	5

【感染症発生動向調査】

感染症発生動向調査委員会報告 12月	6
感染症発生動向調査における病原体検査 12月	9

【検査結果】

由来別病原菌検出状況 12月	10
医動物検査	11

【情報提供】

衛生研究所 WEB ページ情報(21年度12月分)	13
-------------------------------------	----

残留農薬検査(その3)

当所では、横浜市内に流通する農作物や食肉等の食品に残留する農薬について検査を行っています。平成18年5月に施行されたポジティブリスト制度に伴い、現在では有機リン系農薬、有機塩素系農薬、ピレスロイド系農薬及び含窒素系農薬の約90項目について検査を行っています。

今回は平成21年9月から12月末日までに行われた検査結果を報告します。

1 国内産農作物

国内産農作物の残留農薬検査は今年度3回目の実施となりました。今回は11月に食品専門監視班によって搬入された柿、ほうれんそう(各3検体)及びみず菜(2検体)の計8検体について検査を行いました。結果を表1に示しました。

その結果、ほうれんそう1検体からペルメトリンが0.09ppm、みず菜1検体からクロルフェナビルが0.17ppm検出されました。ただし、検出された農薬について残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

2 市内産農作物

横浜市内で生産されている農作物の残留農薬検査は今年度4回目の実施となりました。今回は10月に食品専門監視班によって搬入されたこまつな、ブロッコリー(各3検体)及びさつまいも(2検体)の計8検体について検査を行いました。結果を表1に示しました。

その結果、ブロッコリー1検体からアセタミプリドが0.01ppm検出されました。ただし、検出された農薬について残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

3 冷凍食品

9月に福祉保健センター(磯子、戸塚、中、保土ケ谷)によって搬入されたスイートコーン(4検体)、いんげん、さといも、ブロッコリー(各2検体)、そら豆、オクラ、ブルーベリー、マンゴー、フライドポテト(各1検体)の計15検体について検査を行いました。結果を表1に示しました。

その結果、いんげん1検体からトリアジメノールが0.06ppm、そら豆1検体からメトラクロールが0.02ppm、ブルーベリー1検体からフルジオキソニルが0.02ppm、フライドポテト1検体からクロルプロファムが0.86ppm検出されました。ただし、いんげん、そら豆及びブルーベリーから検出された農薬について残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした。また、加工食品であるフライドポテトから検出された農薬については、加工前のばれいしよの基準値(50ppm)から換算して、基準値を超えるものではないと考えられました^(注1)。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

今回の検査によって検出された農薬については、解説を参考にしてください。

(注1) 食品衛生法の規格基準によると、フライドポテトのような個別の基準値が設定されていない加工食品については、一律基準値(0.01ppm)が適用されます。一律基準を超える農薬が検出された場合、当該品の適否は使用された原材料が基準を満たしているかどうかにより判断することになっています。本件を調査した結果、今回検出された農薬(クロルプロファム)は原材料であるばれいしよに使用されていたことがわかりました。フライドポテトに対するばれいしよの占める重量は約93%であったことから、フライドポテトにおけるクロルプロファムの基準値はばれいしよの基準値(50ppm)の93%に相当するものとしての評価になりました。

表1 国内産農作物等の残留農薬検査結果 (H21年9月～H21年12月末)

農作物	産地	検査 検体数	農薬検出 検体数	検出農薬名	検出値 (ppm)	基準値 (ppm)
国内産農作物						
柿	国産	3	0			
ほうれんそう	国産	3	1	ペルメトリン	0.09	2.0
みず菜	国産	2	1	クロルフェナピル	0.17	10
市内産農作物						
こまつな	横浜市	3	0			
ブロッコリー	横浜市	3	1	アセタミプリド	0.01	5
さつまいも	横浜市	2	0			
冷凍食品						
スイートコーン	アメリカ	4	0			
いんげん	タイ	2	1	トリアジメノール	0.06	1
さといも	中国	2	0			
ブロッコリー	中国 エクアドル	2	0			
そら豆	中国	1	1	メラクロール	0.02	0.3
オクラ	中国	1	0			
ブルーベリー	アメリカ	1	1	フルジオキシニル	0.02	2
マンゴー	タイ	1	0			
フライドポテト	アメリカ	1	1	クロルプロファム	0.86	46.5※

※フライドポテトは個別の基準値が設定されていない加工食品ですが、当該品に対するばれいしよの占める重量は約93%であったことから、その基準値はばれいしよの基準値(50ppm)の93%に相当するもの(46.5ppm)となります。

表2 農薬の検査項目及び検出限界(92項目)

農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)
有機リン系農薬					
EPN	0.01	ジクロフェンチオン	0.01	フェンクロルホス	0.01
イソフェンホス	0.01	ジメチルビンホス	0.01	フェンスルホチオン	0.01
イプロベンホス	0.01	ジメトエート	0.01	フェンチオン	0.01
エチオン	0.01	スルプロホス	0.01	フェントエート	0.01
エトプロホス	0.005	ダイアジノン	0.01	ブタミホス	0.01
エトリムホス	0.01	テトラクロルビンホス	0.01	プロチオホス	0.01
カズサホス	0.01	テルブホス	0.005	プロパホス	0.01
クロルピリホス	0.01	トルクロホスメチル	0.01	ホサロン	0.01
クロルピリホスメチル	0.01	パラチオン	0.01	マラチオン	0.01
クロルフェンビンホス	0.01	ピペロホス	0.01	メチダチオン	0.01
シアノフェンホス	0.01	ピリダフェンチオン	0.01	メチルパラチオン	0.01
シアノホス	0.01	ピリミホスメチル	0.01	メビンホス	0.01
ジオキサベンゾホス	0.01	フェニトロチオン	0.01		
有機塩素系農薬					
BHC (α, β, γ 及び δ の和)	0.005	クロルフェナピル	0.01	トリアジメホン	0.01
γ -BHC(リンデン)	0.002	クロルフェンゾン	0.01	プロシミドン	0.01
DDT (DDE,DDD,DDT の和*)	0.005	ジクロラン	0.01	プロピザミド	0.01
アルドリン及び ディルドリン	0.005	ジコホール	0.01	ブロモプロピレート	0.01
エンドスルファン (α, β の和)	0.005	テトラジホン	0.01	ヘプタクロル (エポキシドを含む)	0.005
エンドリン	0.005				
ピレスロイド系農薬					
アクリナトリン	0.01	デルタメトリン及び トラロメトリン	0.01	フェンプロバトリン	0.01
シハロトリン	0.01	ハルフェンプロックス	0.01	フルシトリネート	0.01
シフルトリン	0.01	ビフェントリン	0.01	フルバリネート	0.01
シペルメトリン	0.01	フェンバレレート	0.01	ペルメトリン	0.01
テフルトリン	0.01				
含窒素系農薬					
アセタミプリド	0.01	テトラコナゾール	0.01	ブプロフェジン	0.01
イソプロカルブ	0.01	テブコナゾール	0.01	フルジオキシニル	0.01
エスプロカルブ	0.01	テブフェンピラド	0.01	フルトラニル	0.01
カフェンストロール	0.01	トリアジメノール	0.01	プロメカルブ	0.01
クレソキシムメチル	0.01	ピリプチカルブ	0.01	ヘキサコナゾール	0.01
クロルプロファム	0.01	ピリプロキシフェン	0.01	ペンコナゾール	0.01
シメトリン	0.01	ピリミノバックメチル	0.01	ミクロブタニル	0.01
チオベンカルブ	0.01	フェナリモル	0.01	メトラクロール	0.01
チフルザミド	0.01	ブタクロール	0.01	メトリブジン	0.01

※ DDTはp,p'-DDE、p,p'-DDD、o,p'-DDT及びp,p'-DDTの和

【農薬解説】

アセタミプリド

『モスピラン』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。広く使われている有機リン系農薬などに対して効きにくくなった多くの害虫に対しても効果があります。

今年度実施した検査では、もも、ぶどう及びチンゲンサイからも検出されました。

クロルフェナピル

『コテツ』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。多くの野菜に適用があり、従来の殺虫剤に耐性がある害虫に対しても効果があります。

今年度実施した検査では、トマト、なし及びぶどうからも検出されました。

クロルプロファム

『クロロIPC』などの商品名で一般的に販売されている除草剤です。冬畑作を主対象とした除草剤で、イネ科雑草に対して選択的に殺草作用を示すほか、タデ類やハコベに対しても効果があります。また、外国では貯蔵されたばれいしよの発芽抑制にポストハーベストとして使用されています。

トリアジメノール

『バイタン』などの商品名で知られている殺菌剤ですが、日本では未登録の農薬です。果樹や野菜等のうどんこ病、さび病、赤星病などの防除に効果があります。

フルジオキシニル

『セイビアー』などの商品名で一般的に販売されている殺菌剤です。各作物の灰色かび病菌に対して極めて高い効果があります。

ペルメトリン

『アディオン』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。茶、果樹、野菜などの主要害虫の防除に使用される農薬です。

今年度実施した検査では、ぶどうからも検出されました。

メトラクロール

『デュアール』などの商品名で一般的に販売されている除草剤です。イネ科及びカヤツリグサ科雑草に効果があります。

参考文献

- ・社団法人日本植物防疫協会，農薬ハンドブック2001年版
- ・農薬残留分析法研究班，最新農薬の残留分析法(改訂版)

【 微量汚染物担当 】

輸入豚肉中の動物用医薬品検査

平成21年10月5日及び11月17日に福祉保健センターが収去した、市内に流通する輸入豚肉の筋肉10件について、動物用医薬品の合成抗菌剤28項目及び内寄生虫用剤1項目の検査を行いました。また、この豚肉の脂肪10件について、内寄生虫用剤3項目の検査を行いました。

その結果、いずれの項目も不検出でした。

表 豚肉中の動物用医薬品検査結果

検査項目名	件数	検出件数	検出限界	検査結果	基準値
豚肉(筋肉)					
【合成抗菌剤】					
エンロフロキサシン(シプロフロキサシンを含む)	10	0	0.005	N.D.	0.05 以下
オキシリニック酸	10	0	0.01	N.D.	1 以下
オフロキサシン	10	0	0.01	N.D.	含有しないこと
オルピフロキサシン	10	0	0.01	N.D.	0.02 以下
オルメトプリム	10	0	0.02	N.D.	0.05 以下
クロピドール	10	0	0.01	N.D.	0.2 以下
サラフロキサシン	10	0	0.01	N.D.	含有しないこと
ジフロキサシン	10	0	0.01	N.D.	0.02 以下
スルファキノキサリン	10	0	0.01	N.D.	含有しないこと
スルファジアジン	10	0	0.01	N.D.	0.1 以下
スルファジミジン	10	0	0.01	N.D.	0.10 以下
スルファジメトキシ	10	0	0.01	N.D.	0.2 以下
スルファドキシ	10	0	0.01	N.D.	0.1 以下
スルファピリジン	10	0	0.01	N.D.	0.1 以下
スルファメトキサゾール	10	0	0.01	N.D.	0.02 以下
スルファメトキシピリダジン	10	0	0.01	N.D.	0.03 以下
スルファメラジン	10	0	0.01	N.D.	0.1 以下
スルファモノメトキシ	10	0	0.01	N.D.	0.02 以下
ダノフロキサシン	10	0	0.01	N.D.	0.10 以下
チアンフェニコール	10	0	0.01	N.D.	0.02 以下
トリメトプリム	10	0	0.02	N.D.	0.1 以下
ナリジクス酸	10	0	0.01	N.D.	含有しないこと
ノルフロキサシン	10	0	0.01	N.D.	0.02 以下
ピリメタミン	10	0	0.02	N.D.	0.05 以下
ピロミド酸	10	0	0.01	N.D.	含有しないこと
フルメキン	10	0	0.01	N.D.	0.5 以下
フロルフェニコール	10	0	0.01	N.D.	0.2 以下
マルボフロキサシン	10	0	0.01	N.D.	0.05 以下
【内寄生虫用剤】					
フルベンダゾール	10	0	0.002	N.D.	0.010 以下
豚肉(脂肪)					
【内寄生虫用剤】					
イベルメクチン	10	0	0.005	N.D.	0.020 以下
エプリメクチン	10	0	0.005	N.D.	0.01 以下
モキシデクチン	10	0	0.005	N.D.	0.01 以下

単位 : ppm N.D. : 不検出

【 微量汚染物担当 】

感染症発生動向調査委員会報告 12月

今月のトピックス

インフルエンザは第44週をピークに、第50週まで6週続けて減少しています。

病原体検出状況では、AH1pdmのみ検出され、今シーズンにおいては、季節性インフルエンザは検出されていません。(12月17日現在)

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、水痘がやや増えています。

感染性胃腸炎は流行が見られていませんが、第51週に入って、市内でもノロウイルスによる集団感染の報告があります。

RSウイルス感染症は比較的低値ですが、神奈川県全域、川崎市、東京都と近隣自治体では増加しています。

全数把握疾患

< 腸管出血性大腸菌感染症 >

12月は16日現在で3例の報告がありました。1月からの報告数は84例であり、昨年1年間の報告数64例を上回っています。

< アメーバ赤痢 >

12月は4例の報告がありました。そのうち一例は海外での感染です。1月からの報告数は33例であり、昨年1年間の報告数47例を下回りました。アメーバ赤痢による感染は、性感染のほかに、飲食物による経口感染がありますので、海外旅行の際には注意が必要です。

アメーバ赤痢についてはこちらをご参考下さい。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/entamoeba1.html>

< 後天性免疫不全症候群 >

12月は1例の報告がありましたが、前月以前の追加報告が4例あり、計5例の新規報告が見られました。5例のうち4例は、男性同性間性的接触によるものでした。1月からの報告数は31例で、昨年1年間の報告は42例でした。日本は先進国の中でも感染の増加が見られています。特に、男性の同性間性的接触の増加が顕著です。感染予防と、早期発見、パートナーへ感染させないことが大切です。

後天性免疫不全症候群についてはこちらをご参考下さい。

<http://idsc.nih.go.jp/iasr/30/355/tpc355-j.html>

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/hiv.html>

< 急性脳炎 >

12月には報告がありませんでしたが、前月以前の追加報告が3例ありました。11歳、18歳、70歳でした。どれも新型インフルエンザによるものです。1月からの報告数は12例で、1例を除いて新型インフルエンザによるものであり、全例新型インフルエンザの流行している9月以降に見られています。昨年1年間の報告は2例でした。インフルエンザに伴う脳炎も、全数届出が必要です。

インフルエンザによる急性脳炎についてはこちらをご参考下さい。

<http://idsc.nih.go.jp/disease/influenza/idwr09week45.html>

届出基準につきましてはこちらをご参考下さい。

<http://kanpoken.pref.yamaguchi.lg.jp/jyoho/page7/5rui-zk03.pdf>

定点把握疾患

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点:88か所、内科定点:57か所、眼科定点:18か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計192か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計145定点から報告されます。

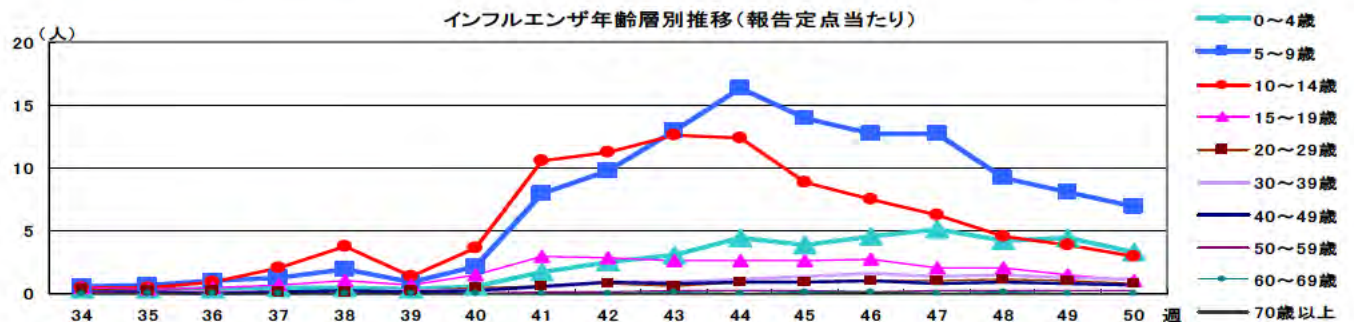
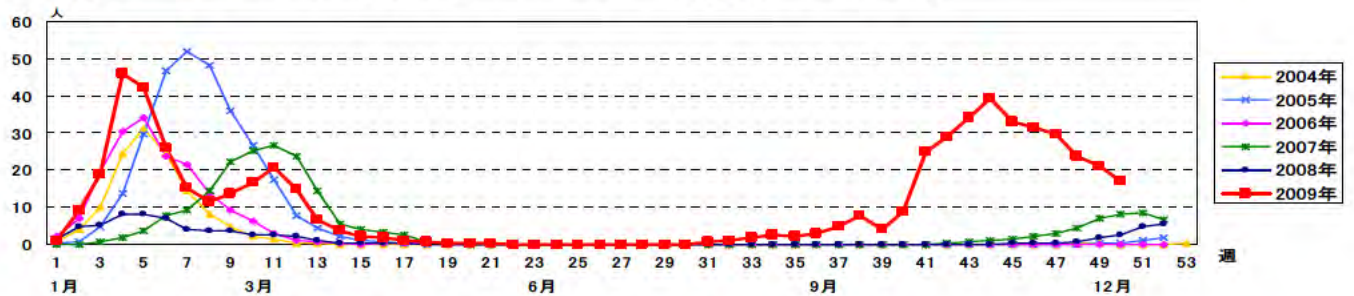
平成21年11月23日から平成21年12月13日まで(平成21年第48週から第50週まで。ただし、性感染症については平成21年11月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成21年 週一月日対照表

週	日
第48週	11月23～29日
第49週	11月30～12月6日
第50週	12月 7～13日

<インフルエンザ>

市内流行状況については、第32週(8月3日からの週)に流行の目安となる定点あたりの報告数1を超え、第44週には39.18と今シーズン最大となりましたが、第50週17.01と6週続けて漸減しています。年齢層別推移でも、何れの年齢層でも低下が見られます。また、定点医療機関からご協力頂いている迅速診断キットの第50週の結果は、A型1894件、B型5件、AB陽性が1件でした。病原体検出状況では、AH1pdmのみ検出され、今シーズンにおいては、季節性インフルエンザは検出されていません。



学校等施設閉鎖の報告数は、ピーク時の第44週では262施設で患者4969人でしたが、第45週では202施設3876人、第50週では72施設820人でした。全国では定点当たりの報告数は27.39、神奈川県横浜と川崎を除いた県域(以下県域)は24.13、川崎市は15.61、東京都は13.75でした。

<RSウイルス感染症>

例年冬季に流行が見られますが、第50週の定点当たりの報告数は0.05です。全国では0.78、県域では0.57、川崎市0.58、東京都0.31と何れも横浜より高めです。今後の流行に注意が必要です。

<A群溶血性レンサ球菌咽頭炎>

例年、春季を中心とした流行の後に夏季には大きく低下し、また冬季に増加します。今シーズンも、第34週に最低値となった後、細かな増減はあるものの増加傾向が続き、第50週には定点あたり1.40でした。行政区別では港北区(6.14)が高く、次いで泉区(3.25)、瀬谷区(2.67)となっています。全国では1.06、県域0.90、川崎市1.36、東京都1.25でした。

< 感染性胃腸炎 >

例年冬季に流行が見られます。第50週の定点あたり報告数は5.63ですが、第51週に入り、市内でも保育園等集団施設の集団感染の報告が続いています。全国4.79、県域4.22、川崎市8.88、東京都6.23です。病原体がノロウイルスによる場合は、アルコールによる消毒が効果はありません。手洗いに加え、吐物、排泄物の処理等施設管理に注意が必要です。

< 水痘 >

例年、年末にかけて発生が増加します。第50週の定点あたり報告数は1.07でした。全国1.33、県域1.32、川崎市1.70、東京都1.16でした。

< 性感染症 >

性感染症は、診療科でみると産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

11月は、10月に比べて全体としては大きな変化はありません。

性器クラミジア感染症は、男性12例、女性21例でした。性器ヘルペスウイルスは、男性6例、女性11例、尖圭コンジローマは、男性8例、女性3例、淋菌感染症は、男性10例、女性1例でした。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点：8か所、インフルエンザ（内科）定点：5か所、眼科定点：1か所、基幹（病院）定点：3か所の計17か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

< ウイルス検査 >

2009年12月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点42件（鼻咽頭ぬぐい液39件、便2件、気管吸引液1件）、内科定点12件（鼻咽頭ぬぐい液）でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点はインフルエンザ（疑いを含む）29人、咽頭炎・気道炎6人、RSV感染症3人、胃腸炎3人、発疹症1人、内科定点はインフルエンザ12人でした。

1月8日現在、インフルエンザ患者（小児科定点25人、内科定点9人）と小児科定点の気道炎患者3人、胃腸炎患者1人の合わせて38人から新型インフルエンザウイルス（AH1pdm）が、小児科定点の気道炎患者1人からコクサッキー - B4型ウイルスが分離されています。また、小児科定点のAH1pdmが分離されたインフルエンザ患者1人からはRSウイルスの遺伝子も検出されています。

これ以外にPCR検査では、小児科定点のRSウイルス感染症患者2人からRSウイルスの遺伝子が、RSウイルス感染症患者1人からAH1pdmとRSウイルスの遺伝子が、インフルエンザ患者1人からコクサッキー - A6型の遺伝子が、胃腸炎患者2人からノロウイルスG2型の遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

< 細菌検査 >

12月の感染性胃腸炎関係の菌株の受付は12株で腸管病原性大腸菌及び腸管出血性大腸菌が各1件でした。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は4件でA群溶血性レンサ球菌が3件よりから検出されました。

感染症発生動向調査における病原体検査12月

感染性胃腸炎

検査年月 定点の区別 件数	12月		2009年1～12月	
	小児科	基幹	小児科	基幹
菌種名				
サルモネラ				
腸管病原性大腸菌		1		5
毒素原性大腸菌				6
組織侵入性大腸菌				
腸管出血性大腸菌		1		7
腸管凝集性大腸菌				
黄色ブドウ球菌				
カンピロバクター			3	
不検出		10	13	85

呼吸器感染症等

検査年月 定点の区別 件数	12月		2009年1～12月	
	小児科	基幹	小児科	基幹
菌種名				
A群溶血性レンサ球菌 T1	1		5	
T2			1	
T3			8	
T4	1		7	
T6			1	
T12	1		16	
T13			1	
T25			2	
T28			10	
T B3264			3	
T 型別不能			2	
B群溶血性レンサ球菌			1	
G群溶血性レンサ球菌				
百日咳菌			1	
黄色ブドウ球菌				1
髄膜炎菌				
インフルエンザ菌				1
肺炎球菌				1
大腸菌				1
不検出	1		23	1

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【細菌担当】

由来別病原菌検出状況 12月

取り扱い件数	156		95	
検体の種類	ヒト		食品	
分離菌株数	糞便、尿、咽頭ぬぐい液、 喀痰等 菌株による依頼を含む		食品、食品容器等のふきとり、 飲料水等	
菌種名	12月	2009年1-12月	12月	2009年1-12月
コレラ O - 1		1		
O - 1以外		2		
赤痢菌 A				
B		1		
C				
D		8		
その他		1		
チフス菌				
パラチフスA菌	1	2		
その他のサルモネラ				
O4群		1		
O7群		1		
O8群		2		
O9群		1		
O3,10群				
その他				
腸管病原性大腸菌	1	5		
毒素原性大腸菌	1	9		
組織侵入性大腸菌				
腸管出血性大腸菌	10	80		
腸管凝集性大腸菌				
腸炎ピブリオ		1		
黄色ブドウ球菌		30	2	
カンピロバクター	9 ^{*1}	43	3	
ウェルシュ菌		11		
A群溶血性レンサ球菌	3	56		
B群溶血性レンサ球菌		1		
レジオネラ		3		
セレウス菌			2	
インフルエンザ菌		1		
肺炎球菌		1		
百日咳菌		1		
VRE	11	12		
その他				

^{*1} 一集団食中毒事例より分離された *Campylobacter jejuni*

医動物検査

医動物室における平成21年10～12月の検査件数を表に示しました。

【行政検査：福祉保健センター、市場食品衛生検査所など行政からの依頼】

食品中異物検査が7件(生うにに混入したオオクロバエの幼虫、白いんげん豆に混入したインゲンマメゾウムシ、ハーブティに混入したチョウ目の一種、ほしいちじくに混入したノシメマダラメイガの幼虫・タバコシバンムシ・チョウ目蛹の脱皮殻、ココアに混入したタバコシバンムシの幼虫)、種類同定検査が9件(コンボウヤセバチ科の一種、ヒゲナガヤチバエ、ヤマアリの亜科の雌有翅虫、ヒメカツオブシムシの幼虫、ニホンミツバチ、キイロシリアゲアリの雌成虫、ヤマトシロアリの兵蟻・職蟻、ハエトリグモ科の幼体、ノシメマダラメイガの幼虫)でした。

ウエストナイル熱媒介蚊調査のために、市内公園や港湾地区などで週に1回ライトトラップを用いて採集された蚊を分類同定しました。10月中に3回(1回10定点)調査を行いました。期間中に採集された蚊は、6属9種、471個体(雄を含む)でした。平成21年度の本調査における蚊の総捕獲数は6属13種5,592個体(雄を含む)でした。

【依頼検査：市民、事業者からの有料依頼】

食品中異物検査が1件(肉まんに混入したマドチャタテ科の一種)、種類同定検査が2件(ゴキブリの糞、コクヌストモドキ)でした。また、ゴキブリに対する殺虫剤効力試験を実験室内で行いました。

【その他：感染症媒介昆虫等の市内における生息状況を把握するために行う調査や市民からの問い合わせ等】

中区、磯子区、南区でライトトラップを用い、週に1回飛翔昆虫調査を行いました。10～12月中に35定点の調査を行いました。

また、中区の5飲食店、48定点で粘着式トラップによるチャバネゴキブリの生息状況調査を実施しました。10～12月中にのべ539ヶ所の調査を行いました。

感染症媒介昆虫調査の一環として、磯子区において雨水枡における蚊幼虫調査および粘着式トラップを用い、飛翔昆虫調査を行いました。

検査試験項目	平成21年			平成21年	
	10月	11月	12月	4～12月	
行政検査	種類同定検査	8	1	0	32 件
	食品中異物検査	1	2	4	11 件
	ウエストナイル熱蚊検査				
	採集地点数	30			200 定点
	個体数	471			5,592 個体
依頼検査	種類同定検査	1	1		6 件
	食品中異物検査	1			2 件
	発生状況調査(ダニ類)				
	調査回数				0 件
	個体数				0 個体
	殺虫剤効力試験	16			16 件
その他	ゴキブリ調査	182	183	174	1,803 カ所
	飛翔昆虫調査	11	12	12	115 定点
	その他の調査等	145	70	70	1,307 件
	問い合わせへの回答	24	10	10	156 回

検査試験項目等 解説

種類同定検査

福祉保健センター、市民、事業者などから依頼のあった昆虫・ダニ類の種を調べます。種が明らかになることにより、生態等が判明し、その発生時期、発生場所、害の有無などに基づいて駆除の必要性、駆除方法、予防法などが明らかになります。

食品中異物検査

福祉保健センター、市民、事業者などから依頼のあった食品に混入した昆虫の種を調べます。種が明らかになることにより、生態等が判明し、混入経路を推定する一助となります。

ウエストナイル熱媒介蚊調査

健康福祉局の「ウエストナイル熱対策事業」におけるウエストナイルウイルスの調査を行っています。種ごとのウイルス保有状況を調べるため、市内公園や港湾地区などで採集された蚊を分類同定します。なお、採集した蚊についてはウイルス担当において、日本脳炎ウイルスの検査も合わせて行っています。なお、検査結果については、衛生研究所WEB ページ(病原体情報)をご覧ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/pathogen/infc_kakekka.html



ダニ類等発生状況調査

市民からのかゆみや虫刺されの相談に基づいて、必要に応じて、住宅内でのダニ検査を行います。ダニ発生の有無を調べ、発生している場合には人を刺すダニであるかなどの検査を行います。

殺虫剤効力試験

新しく開発された防疫用殺虫剤の効力試験を、室内(基礎)および野外(実地)で行います。

ゴキブリ調査

実際に営業している飲食店におけるゴキブリの生態を把握するため、また殺虫剤の実地効力試験の予備調査として、ゴキブリ生息状況調査を行っています。

飛翔昆虫調査

ライトトラップを用い、時期ごとに大量発生している昆虫類等の発生状況や感染症媒介昆虫である蚊類成虫を中心とした飛翔昆虫の発生状況を調査しています。

その他の調査等

21年度は、雨水枡内での蚊、その他の害虫の生息状況調査、ヒトスジシマカ成虫の捕獲調査を行っています。

問い合わせ

市民の方などから相談のあった、昆虫・ダニ、昆虫媒介性疾病、殺虫剤などに関する不安、疑問に回答、助言、指導をします。

体長は約 3mm。小さいけれど、乾燥食品であれば、ほとんどのものを食べます！！

食品の保存には、注意しましょう！

写真:タバコシバンムシ幼虫

【 医動物担当 】

衛生研究所WEBページ情報

(アクセス件数・順位 21年度11月分、電子メールによる問い合わせ・追加・更新記事 21年度12月分)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、1998年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

2008年4月、市民にわかりやすくかつ迅速な情報提供を目指して、リニューアルを行いました。

今回は、2009年11月のアクセス件数、アクセス順位及び2009年12月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については行政運営調整局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (2009年11月)

2009年11月の総アクセス数は、231,155件でした。主な内訳は、感染症68.5%、食品衛生11.9%、保健情報7.9%、検査情報月報2.3%、生活環境衛生1.2%、薬事1.5%でした。

(2) アクセス順位 (2009年11月)

11月のアクセス順位(表1)は、第1位が「インフルエンザ情報」、第2位が「マイコプラズマ肺炎について」、第3位が「感染症発生状況」でした。

第1位に「インフルエンザ流行情報」が入りました。

新型インフルエンザが流行し、関心が高かったものと思われます。上位10位中7項目がインフルエンザについての関連記事でした。

横浜市におけるインフルエンザの定点あたりの患者数は、第31週(7/27～8/2)から徐々に増加し、第39週(9/21～27)シルバークウィークで減少した後、第40週(9/28～10/4)から再度増加し、第41週(10/5～11)で定点あたり24.8と、前週の3倍となり、注意報レベルの10を超えました。

その後、3週連続で増加が続き、第43週(10/19～25)で警報レベルの30を超え、第44週(10/26～11/1)をピークに、減少に転じました。そして、第53週(12/28～1/3)年末年始で定点あたり4.04となり、終息基準値の10を下回りました。

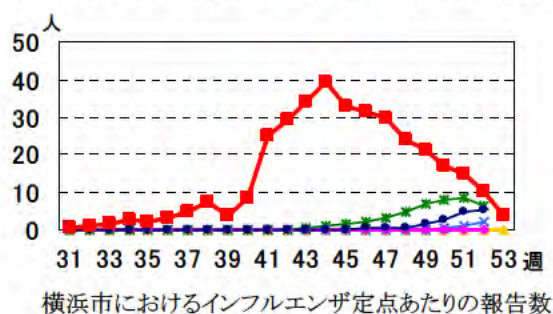
第2位に「マイコプラズマ肺炎」が入りました。

マイコプラズマ肺炎の定点あたり報告数は、第48週(11/23～29)は減少しましたが、第49週(11/30～12/6)、第50週(12/7～13)と2週連続で増加しました。

表1 2009年11月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	インフルエンザ情報	8,606
2	マイコプラズマ肺炎について	8,238
3	感染症発生状況	7,745
4	衛生研究所トップページ	7,303
5	2009(平成21)年度の季節性インフルエンザワクチンについて	6,849
6	インフルエンザワクチンについて	5,214
7	新型インフルエンザ(AH1pdm)のワクチンについて	4,936
8	インフルエンザについて	4,915
9	チメロサルとワクチンについて	4,051
10	梅毒について	3,961

データ提供: 行政運営調整局IT活用推進課



(3) 電子メールによる問い合わせ (2009年12月)

2009年12月にホームページのお問合わせフォームを通していただいた電子メールによる問い合わせの合計は、2件でした(表2)。

表2 2009年12月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
MDMAについて	1	衛生研究所
食肉製品へ着色料の使用について	1	衛生研究所

2 追加・更新記事 (2009年12月)

2009年12月に追加・更新した主な記事は、6件でした(表3)。

表3 2009年12月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
12月4日	横浜市における自殺の現状(平成20年)	追加
12月4日	感染症に気をつけよう(12月号)	追加
12月9日	ウエストナイルウイルス(蚊)の検査結果	追加
12月24日	高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)の発生状況	更新
12月28日	横浜市における自殺の実態(平成20年)	追加
12月28日	横浜市インフルエンザ等流行情報 11号	追加

【 感染症・疫学情報課 】